

高原町小学校体育連盟



研究主題

「運動の楽しさに触れ、進んで体力の向上に取り組もうとする児童の育成」

～「できる」を意識したゲーム・ボール運動領域の指導を通して～

主題設定の理由

- 運動技能の二極化（スポーツ少年団）
- 運動体験の二極化（特定の運動のみ）
- 運動への関心の二極化



運動への取り組み方が「わかる」「できる」ことを実感させる

研究仮説

ボール運動領域の授業において、児童の発達段階に応じて指導内容を明確にし、友達との関わり合いを大切にした学習指導の工夫・改善を行えば、児童は運動の取り組み方が「わかる」とともに、「できる」を実感するための技能を身に付け、進んで日常的に体力向上に取り組む児童の育成に資することができるであろう。

研究内容

- 1 発達段階に応じた指導内容の明確化
- 2 友達との関わり合いの充実
(言語活動の充実)

高原町小体連の研究発表。

研究主題を「運動の楽しさに触れ、進んで体力の向上に取り組もうとする児童の育成」副題を～「できる」を意識したゲーム・ボール運動領域の指導を通して～として研究に取り組んできた。

児童の実態として、スポーツ少年団に所属している児童と所属していない児童との格差が大きいことがあげられる。スポーツ少年団に所属している児童も、自分の取り組んでいる特定のボール運動は得意だが、それ以外の運動は苦手な児童がいたり、運動に関する興味関心も、所属している児童とそうでない児童との格差が大きかったりする。特に、興味関心が高くない理由として、運動の経験が浅い児童は、「できる」という実感を体験していないため、運動の楽しさを味わえていないことが考えられる。そこで運動への取り組み方が「わかる」、「できる」ことを実感させることが大事であると考え、本主題を設定した。

研究仮説はボール運動領域の授業において、児童の発達段階に応じて指導内容を明確にし、友達との関わり合いを大切にした学習指導の工夫・改善を行えば、児童は運動の取り組み方が「わかる」とともに、「できる」を実感するための技能を身に付け、進んで日常的に体力向上に取り組む児童の育成に資することができるであろう、とした。

研究内容は、1 発達段階に応じた指導内容の明確化
2 友達との関わり合いの充実（言語活動の充実）とした。

1 発達段階に応じた指導内容の明確化



技能面の個人差の解消



ボール慣れの時間の設定



レディネスをそろえる

キックベースボールの実践（3．4年）



研究の実際を、授業実践とともに紹介。1 発達段階に応じた指導内容の明確化では、まずそれぞれのボール運動の特性に応じてルールの変更を行った。運動の楽しさを味わわせるためには、「できる」ことを実感させなければならない。技能面の個人差を解消し、苦手な児童にも参加しやすくするために、ルールを工夫した。

ソフトバレーボールの実践紹介。児童がボール操作をしやすく、また戦術を考えられるように、一部のルールを次のように変えた。ボールを弾くというボール操作の代わりに、キャッチしてよいというルールを設けることにより、児童が安心してソフトバレーボールに取り組めるようにする。ただし、キャッチボールにならないように、仲間につなげることと、ボールを持って動いてはいけないこと、そして4回目に攻撃してよいというルールを加えることで、「ボールを持たないときの動き」についての技能を身に付けさせることをねらいとした。

キックベースボールの実践紹介。ピッチャーは味方チームから出すようにした。味方チームに有利なようにゆるいボールを転がすことで男女のキック力の差を少なくすることをねらいとしている。3アウト交代ではなく、チーム全員が蹴ったら交代にした。これは、苦手な児童にとって、自分でチェンジになってしまう不安を取り除き、全員公平に攻撃の機会を与えることで安心感を与えることをねらった。女子はノーバウンドでキャッチしたら1点とした。これは、ボールをこわがらず積極的にボールに触れようとする意欲を高めることをねらいとした。どちらの実践も全員が楽しくゲームに参加できた。

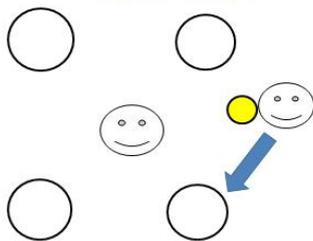
2つめに、授業の一単位時間の中に、ボール慣れの時間を設定した。これは、技能面のレディネスをそろえるために、位置付けた。

キックベースボールの実践では、ゲームの前に、基本となるボールをキャッチする、投げる、遠くに蹴るといった技能を身に付けさせるための練習を設定した。キャッチボールをするときに、ボールを投げる際の足の踏み出し方、ひじや体の使い方を意識させ、正確に相手に投げる、そしてキャッチすることを反復練習させた。



ソフトバレーボールの実践

基本的な動きを高める手立て



バスケットボールの実践では、ボールに慣れるようにするために、手渡したり、転がしたり、投げたりするボール運びゲームを初めの段階として実施しました。また、ゲームの決まりや協力することを確認する時間を設定した。その結果、不平を言うことなく、声を掛け合ってプレイすることができていた。基礎練習による運動量の確保と技術の向上を図るために、シュートの練習時間を設定し、一定のリズムで行うことで、1人が投げる回数を多くするようにした。また、シュートしたあとの動きについても、すぐにとりに行き、次の児童にパスをするように指導した。単調にならないように、ゲーム化することで楽しんで基礎的な技術の向上を図ることができた。また、少人数による簡易化されたゲームを実施した。6人でするゲームを3人にすることで、1人1人のボールを持つ回数が増え、技術の向上が図られた。

ソフトバレーボールにおいて、学習での基本的な動きとは「ボールを真下でキャッチ」すること。この技能を高めることで、ラリーが続くようになる。この技能を高めるために、スライドのような学習を毎時間取り入れた。図のように、ボールをもっている児童が、4つのケンステップに向かって投げる。ケンステップにボールが落ちないように、真ん中の児童がボールを取る。ボールが落ちるところを予想しながら、ボールの真下に体を動かし、しっかりとキャッチする、というものである。写真のように、ボールを目で追いながら、ボールの真下に体を動かしてキャッチする学習を毎時間取り入れたことで、児童は瞬時に判断し、機敏に体を動かせるようになった。

2 友達との関わりあいの充実 (言語活動の充実)

- 児童同士の教え合い



主体的に運動に取り組む態度を育てる

次に友達との関わりあいの充実について。児童同士でよかった点や、技能向上のためのアドバイスをしあうことで、教師主導ではなく、児童が主体的に運動に取り組もうとする態度を育てる上で有効であると考えた。



研究の成果

それぞれのボール運動の特性を理解し、ルールを工夫することで、児童は技能面の格差を小さくでき、「できる」を実感しながら楽しく活動することができた。

身に付けさせたい最低限の技能を、一単位時間の中に習得、練習する時間を設定し、友達同士で教え合ったり、グループでめあてや作戦を決めたりすることで、運動への取り組み方が「わかり」、意欲的に活動することができた。

今後の課題

少人数でも楽しく活動できるルールや場の設定の工夫

ボールを使った運動の日常化

ソフトバレーボールでは、戦術面の技能を高めるための手立てとして、4回目で攻撃するためにネットの近くで、相手のいないところにボールを返すというポイントを押さえ、ボールをもたない人はどう動けばよいかをホワイトボードと磁石を用いて考えさせた。ゲームを始める前に、チームごとに作戦タイムを設定し、その日のゲームのめあてを設定させた。技術的なことよりも、チームで声を掛け合う、失敗しても責めないといったものを共通理解させた。ゲームの終わりには、めあてが守れたかどうかの振り返りと、その日のよかった点や悪かった点を振り返らせ、次時へのつなぎとした。

キックベースボールでは、ゲームを始める前に、チームごとに作戦タイムを設け、その日のゲームのめあてを設定した。技術的なことよりも、チームで声を掛け合う、失敗しても責めないといったものを共通理解させた。ゲームの終わりには、めあてが守れたかどうかの振り返りと、その日のよかった点や悪かった点を振り返らせ、次時へのつなぎとした。

バスケットボールでも、同様の時間を設定した。また、フェアプレー7つの約束を確認させ、全員が気持ちよく楽しくゲームに参加できるようにした。お互いを尊重し合い、チームワーク作りの上でも有効な手立てとなった。

最後に研究の成果。それぞれのボール運動の特性を理解し、ルールを工夫することで、児童は技能面の格差を小さくでき、「できる」を実感しながら楽しく活動することができた。また、身に付けさせたい最低限の技能を、一単位時間の中に習得、練習する時間を設定し、友達同士で教え合ったり、グループでめあてや作戦を決めたりすることで、運動への取り組み方が「わかり」、意欲的に活動することができた。

今後の課題としては、少人数でも楽しく活動できるルールや場の設定の工夫、ボールを使った運動の日常化があげられる。これらの点については、今後さらに研究を深めていきたい。